

やまなし文学賞青少年部門佳作

畜ケルベロス談 米山柊作・作

ケルベロスを見た。秋の暮れのことである。

私はしがない物書きとして細々と暮らしていた。仕事の都合上、長いこと椅子に座りっぱなしなので日々の運動と頭の整理を兼ねて近所をウロウロと散歩することも少なくなき、駅を跨ぐ前の穏やかな古川と共に季節の風情を感じながらそぞろ歩いていた時分。なだらかな傾斜の坂道になっているその中腹地点、ちようど分かれ道が三叉路になっさんさろてケルベロスに出くわした。向こうの道から、私よりもほんの背が高いほどの婦人が鼻歌交じりにケルベロスを散歩させている。

私は吃驚仰天びつくりした。二、三步後ずさりしながら、熊に相對した時には背中を見せてはいけなかつたのだらうか、などと頓珍漢とんちんかんなことを考え始める。しかし、幾ら頭の中枢を冷静に努めようと、息は過呼吸を起こしたときのように絶え絶えになり、前身はあぶく立つように発汗、胃の後ろの辺りから耳介筋じかいきんまでぞわりと悪寒が逐電する。土踏まらずは土を踏み、膝が左右にかくかくと揺れて、目の焦点は遠くと近くを幾回か繰り返してケルベロスの眉間のあたりに集中している。頬の筋力がへにやりと抜けてだらしなく口が開くのが分かった。力を込めていなければ、今にも失禁してしまいそうなほどである。ゆったりとしたせせらぎの音が妙に大きく聞こえるような気がする。

私はその場で立ち尽くしていたが、婦人は奇妙そうに私を一瞥いちべつしただけで、ケルベロスと共にずんずんと歩みを進めてくる。私は何も見ていないような平静さを装って川の流れを見つめる。何か面白いものでも見つけたかのように口を尖らせて眉を吊り上げる。よしんば、婦人が散歩させているのが体長二メートルの大型ゴールデンレトリバーだとしても「大きい犬ツコロがいたもんだナア」くらいの気持ちで、そりゃあ或る程度は恐怖心も幾ばくか持つかもしれないけれども、こうして身じろぎも出来なくなるほどの事態には陥らなかつた。普通に考えて、ケルベロスがそこら辺を歩いているはずがない。まして、その手綱が介の子の手に握られているなんてことはもつとない。婦人は吞氣のんきそうに手綱を掴つかんでいるが、その気になればケルベロスが縄を引きちぎって自由の身を手に入れることができなんてのは言うまでもない。口にするのも怖ろしいが、飼い主を食いちぎってしまうことだって可能なのだから、今ここにいるのは野晒のまじしにされた獵犬、麻葉の嗅ぎすぎで正気を失った警察犬よりも遙はるかに怖ろしい地獄の門番。自明である。あまりにも滑稽だ。ははは。

次第にケルベロスがその舌を垂らしながら私に近づいてくる。ギョロリ、どろどろと動く

眼球はこの世のものとは思えない。よだれが垂れる。

そもそも、諸君はケルベロスがどういう生物かご存じであろうか？ もとはといえばギリシア神話に登場する犬の化物である。冥府の番犬、その意味は「底なし穴の霊」といかに凶悪醜態なものである。その、今日のまえに立ちはだかる猛犬は、筋骨隆々の犬らしい丸みを帯びた肉体に、うねるように生えた三つの首。それぞれの頭が独立した意志を持ち、互いをいがみ合い、まるで我先にと言わんばかりに目の前の獲物を屠ることに従事する。犬の攻撃力の大部分を担っているのがその鋭い牙と強靱な顎の力なことから、単純計算に於いてもケルベロスの攻撃力は通常の獐猛犬の三倍はある。また知能も著しく発達しているだろう、犬の脳は哺乳類の中でも猿、馬、イルカに次いで四番目に質量があり、その重さは六十三グラムだというのだから、三つかけ合わせて百八十九グラム、これは人間の脳の重さの十四・五パーセントに相当する。さらに嗅覚、聴覚、頭に統一されたあらゆる感覚器官が通常の犬の三倍の能力を有しているのだ。そして、その余りある頭部をがっしりと支える下半身。身体は一本一本が針のように鋭く尖った剛毛に覆われており、陰よりも濃い真つ黒な身体は、闇夜に乗じて息を潜ませるのに格好だ。足の筋肉も目を見張るもので、そこらの若木ほどの太さがあるのではないだろうか。その前腕に備えられた鋭い爪で私のふっくらとした肌合いから艶めかしいほどの黝い血が飛散することを想像して身震いする。

さて、ケルベロスの恐ろしさを空想頂けただろうか。彼らに目をつけられたが最後、その地に残るのは見るも無残なヒトであった亡骸。

道幅は狭かった。ケルベロスが私の傍を通り抜ける際、その耳が私のジーンズに触れようとしている。難癖付けられて噛みつかれたのなら堪ったものではない。私は顔面に満面の微笑を湛えて、いささかも敵意がないことを示した。すると、ケルベロスは私の少し後方で足を止める。ゆつくりと私が振り返ると、ケルベロスは首の根元につけられた首輪をぶるんと震わせて、婦人の手から手綱を奪い取る。婦人は「まア」と呟き、少し思案する素振りを見せてそのまま三叉路の分かれ道の奥へと消えてしまった。

目は口ほどにものを言う。ケルベロスは手綱を口に啞えたまま座して私を見つめているのだった。その獣らしい目に合わせまいとするが、耳鳴りが磁力線のようにこだまして、私の瞳はケルベロスの六つの目に妖しいほどに寄せられる。それは自身の尊厳を威喝しているようでもあり、私の小狡い性分を見透かしているようでもあり——否応なしに私に手綱を握らせることを強要するまなざしであった。泰然自若としたその態度は弱肉強食という自然の掟でもって人間が動物を服従させるといった社会の摂理を馬鹿にしているように感じられる。たった数瞬でこの鈍く光る牙を貴様の喉元へ突き刺す、支配者の表情。弱者の諂

いは何の意味もなさないことを示す修羅の形相。

私はおぼろげと、散歩紐ひもにしてはあまりにふとましいそのしめ縄のような手綱を手に取る。ケルベロスは何処どこに行く気配もなく、縄を持つ私が先導するのを待っているようだった。私は油の差されていないアンドロイドのように歩みを進める。

先の婦人はどこへ行ってしまったのだろうか？ 彼女がこのケルベロスの飼い主ではないのだろうか？ この縄は誰が用意したんだ？ けるべろすってなんだ？ 数多あまたの疑問が素早く脳裏を駆け抜けていくが、残されたのはこの唾液と獣と血の匂いが混じった手綱だけだ。なんだか馬鹿馬鹿しくなってきたので考えるのをやめた。一応、婦人が消えた方へと足を向けるが、その姿はどこにもない。彼女さえもケルベロスの意志にて手綱を預けられた人間だったのだとしたら、私と同じように彼奴きゃつを不満足させないような忖度そんたく散歩を演ずることを余儀なくさせられていた不幸な一般市民に過ぎなかったのだろうか。それとすれば、彼女はなんと見事な自然体だったのであろう。中世前期のヨーロッパでは下手な芝居をうった人間に極刑が言い渡されていたらしいが、そんな時代錯誤甚だしい、生死の掛かった薄氷演技を彼女は完遂したのだ。当の私はケルベロスが不満を感じたその瞬間に、手ももがれ、足ももがれ、頭部を隅まで食い尽くされてからこの傍を流れる一級河川の清流へと流されていくのだ。命の儂はかなさを悟る。

一時間近くは歩き回っただろうか。運が良ければ先の婦人から私へ手綱が手渡されたように、ケルベロスの気まぐれで散歩を肩代わりしてくれる不幸な人間がいるかもしれないと人通りの多いところへ出てみようと思っただが、やめた。人目につくのも嫌だし、興奮したケルベロスが誰彼構わず襲い掛かるとも知れない。誰か助けてくれ、誰かこの悪魔のバトンを代わってくれ、と願うが、時折すれ違う人がいても、ギョツと驚き二度見三度見をするだけで過ぎたハロウィーンハロウィーンの遅刻仮装かと真面目にとりあう素振りはない。ケルベロスは一心不乱に散歩をしている。

突然ケルベロスが立ち止まり、己を見つめて早く帰れとでも言わんばかりに座す。三つの喉を震わせて「バウ」「ビャウ」「ビョウ」と器用に和音のような音を奏でた。実に不吉な音だった。私は暗くなりかけた住宅街をとぼとぼ歩いて帰る。

家内は騒然とした。しかし、それも一時ひとときのもので「名前はないの？」と言い、めんこい、めんこいと頭をなでる。ケルベロスも満更まんげつではなさそうで、家内から出されたシーチキンの缶詰を物足りなさそうに頬張っている。私だけがのけ者のような空気で、家内がケルベロスに手を伸ばすたびに心臓をギョツと縮める。ああ、耳なんて触ったら食われる、食われるぞ！ 私は家内を何度も諭そうとするのだが、「頭が三つあるだけで、そこらの野良なんか

よりよっぽどお利巧りこうじゃないの。あなたは神経質すぎるんだわ」とにわか笑いをする。いつもそんなのだ。私が何か注意をしたとしても、家内は何も意に介さずに笑っている。それが後々都合の悪いことを起こして、ほうらね僕の云いった通りじゃないか、と追及しても知らんぷりをする。しかし、今回ばかりは笑って済ませられることではない。取返しつかないことになってなる。その、頭が三つもあることが今は問題なんだと論ず。しかし家内は動じない。

どうなっても知るもんか！ と私はさっさと寢床につく。そうはいつでも家内のことが心配だったから何度も用便や飲水のために立ち上がる。次第に家内も飽きたらしく床に入ってから、私も安堵あんどして眠ることが出来た。否、眠っている最中さなかにあの野獣に襲われるかもしれない、と寝る前にもう一度だけ家の鍵が閉まっているかを点検する。ケルベロスはまだ庭先にいた。夜の闇にフクロウのような目ん玉が浮いている。私は心底気味悪くなって、翌朝になったらケルベロスが消えていることを願いながら布団に潜った。家内は呑気いひまに軒を立てている。ああ、頼むからこれまでのことはすべて夢、悪夢。朝起きたら何事もなかったかのように一日が始まり、終わってくれ。せめて、私が連れてきたのはケルベロスなんかではなく、ただの土佐犬、ドーベルマン、シベリアンハスキー……、いくら屈強でもいいから常識の範囲内で一頭、二頭と数えられる類たぐいの獣であつてくれと願う。

翌朝になっても、ケルベロスはさも当然であるかのように鎮座していた。嫌な記憶は翌日に持ち越さずに抹消してしまう私の性分だったから、遅めの朝めしを食ってカーテンを開けたときに大層驚いたものだった。そして絶望する。私が考え得る悪しき想像というのは、恐らくすべて実現する。このままケルベロスは家に居着いてしまうだろうという呪いめいた確信があった。彼奴を一目見た時に、敵意を示すまいと浮かべたほんの一瞬の微笑が私の半生とこれからの一生を台無しにしてしまったのだ。遅すぎる後悔に重ね重ね頭を抱える。

その後、一週間、半月、ひと月、ふた月……、ケルベロスは庭の隅に居座ってしまった。雨などで機嫌を悪くされても困るので、私は渋谷々日曜大工の延長で犬小屋を建てる。犬餌なども買ってきたが、ケルベロスの攻撃的な味蓄みらいには合わないようでペツと吐き返される。私はその吐き出されたガムのような屑くずが、自分の小さな内臓の一部のように思えて、どうにも堪らなくなって家内に頼み一人分の飯を増やしてもらおうことにした。食費は嵩かさむが仕方のない事である。また、ケルベロスは洗濯物にじゃれて泥だらけにしてしまったり、勝手に飯を漁あさったり、粗相をしたり、ケルベロスと言っても所詮しよせん犬ツッコロと変わらんのだろうか、と思わせることもあれば、身体からだの芯から凍えつくような深い闘争欲を湛たたえた目をすることもある。目間めあいの距離が近く、視界を立体的に捉えることの出来る典型的な捕食者の目。時折、

家賃のつもりか何だか知らないが、タヌキやウサギといった小動物の死骸を啜えて帰ってくることもある。そのたびに私は震え、気持ちの悪い死骸を処理し、眠れぬ夜を過ごすのだ。「やめなさい」と私が言っても、まるでいうことを聞かない。

どちらが主か、それは弱肉強食と社会の摂理の関係性から日々深くは追究しないようにしている事象だが、ある程度の譲歩や折衷は行われるべきなのだ。そのくせにして、家内のいう事だけは素直に聞く。我家の等級が分かっているんだワ、と家内は得意そうにケルベロスを甘やかすのだが、私はやっぱりいつ飼いだに手を噛まれるといった事態が発生するか、慣れで解決するもんじゃないだろうと怯える。噛まれる程度じゃ済まんのだ。

「ポチ、ポチ、およしなさい」

通りすがりの野良に喧嘩をけしかけるケルベロスを諷める。「ポチ」というのは家内がつけた便宜上の仮名だ。これだけ物騒ななりをしているのに、ポチとはまたなんと安直で可愛らしくてチッコイ名前なのだろう、と家内のいい加減なネーミングセンスには首を傾げるが、そのアンバランスなギャップが妙な面白味を醸していてケルベロスの一挙手一投足が滑稽に映る節がある。せめてもの恐怖心を塞ぎこむうえではこれ以上ない方法と言えた。ただ、私はケルベロスに向かって声を掛けるのも怖ろしかったのでアクセントが自然と「ポ」ではなく「チ」に移ってしまい、ちようど果物の方の「かき」と同じようなイントネーションになってしまい恰好がつかず、ポチも自分が呼びかけられたのかと判然としない様子であった。「ポチ、ポチ、やめなさい」。ポチは私の静止を聞かず赤いムク犬に飛び掛かっている。この街には野性味の強い野良が多かったから、ポチは多方からキャンキャンと威嚇される。その度にポチは日々威嚇に付き合っって見境なく路上格闘をする。大型哺乳類に見られる大きな故の寛大さというものがまるでない。無論、ポチは圧倒的に強かった。肉体だけでもそこらの犬を一蹴させられるのに、凶暴な頭部が三つもあるのだ。負けるはずがない。一時、十頭もの野良を相手にしたときは流石に肝を冷やしたけれど、ポチは難なくその場を制圧した。賢い野良なんかはその後仲間を引き連れて仕返しにやってくるのだけどまるで歯が立たない。最初の内こそ私もポチを止めようとはしていたけれど、首元につけられた散歩紐など全く意味を為さず、とんでもない力でもって私を振り回し、踏ん張りが効かず、電柱や駐車場ポールに痛めつけられたので、野良の卑しい反撃が私に向かってこないと判断してからはポチの好き勝手にやらせることにした。犬同士の喧嘩というのも、見方によってはそれなりに見物になるものである。見世物としては、少々愉快であったが、やっぱりその牙が自分に向かってこないという保証はない。

「喧嘩は、よした方がいいんじゃないかな」。そうは言っても、その後本当に死んじまう

んじゃないかというほどの傷を負った瀕死の野良を見るのは後味が悪いし、そいつらがもうひとつ頭を働かせて私に報復してくるといふ線もやはり拭いきれない。一番は、こうして争いを止めることで徹底的な暴力反対を説く、そしてポチが喧嘩なんかやめて少しでも気性が上品になればいいという打算からである。すると、いつものように威嚇してくるムク犬を蹴散らそうと右脚を掲げたポチだったが、何の気まぐれか、そのまま足を下ろして小さなミスを取り繕うような気まずさで散歩紐を啜えて私の方へと戻り、散歩を再開するよう促す。「喧嘩は、よすのかい」と私が問うてもポチは何も言わずに眉間に皺を寄せたまま私を凝視する。相変わらず、何を考えているのかまるで分からない犬である。私が散歩を再開させると、後ろで野良たちがワン、ワンと威勢よく吠え立てたが、ポチが再び後ろを向いて「バウ」と吠えると野良は尻尾を下げてそそくさと退散するのだった。

以降、ポチは喧嘩をしなくなった。そこらの野良に吠えられても、余裕を見せつけるように尻を向ける。相手があんまりしつこいとバウ、と吠えた。逃げない犬はいない。それが良い事か悪い事か分からないが、強者の風格というものがむくむくと備わってきているようだった。強靱な肉体と不気味な目と鋭い牙と三つの頭を除けば、従順な大型犬に見えなくもない。ただし、その内に秘めた闘争心が、いつか火を噴くんじゃないかと正直に言って不気味であった。普段から何を考えているか分からなかったが、直情的に行動するうちはまだ理解が及ぶ範疇だったその黒い瞳孔は、既にこの世のものらしからぬ妖しさを漂わせている。動物というものは本能的に「なんとなく」で本能から行動するというのが私の見解だが、ポチの動向の予測はよりいっそう困難なものとなり、私の警戒と恐怖を煽らざるをえなかった。

ポチが喧嘩をしなくなってしばらくしてから、どうにも身体がむず痒いのか、しきりに身体を掻くようになった。その執着ぶりは異様で、何かに取り憑かれたかのように身体中を掻きむしる。遠くからその身体をよおく見てみると、体毛よりは淡い赤みがかった黒色のかさぶたが点々と出来ていた。膿んで出血しているところも多々。

さらに日が経つと、次第に肌がコケて、体毛が抜け始める。気のせいか、身体も少し縮んでいるように見えた。以前は丸太ほどもあったポチの前脚が、二リットルペットボトルほどの太さになっている。どんどん虚弱な様になっていくポチは、普通の犬の何倍もの速度で老いているように見えた。顔には薄らと皺が寄り、口からは腐った魚のような臭いを吐いている。喧嘩を辞めたから弱くなったのか、弱くなったから喧嘩を辞めたのか、私が知る由はないが、あれほど自由気儘に振る舞っていたのだ。私の言い分を守るために喧嘩をしないということはない。

ポチは次第に衰弱していく。最初のうちこそ痩せていくにしても筋肉の筋は残したまま、ボクサーの減量の要領で目の奥に修験者のような荒々しい光を灯らせていたが、今ではこれらの雑種と変わりない濁った眼になってしまった。白内障も併発しているのか、耳と鼻に頼って行動することが多くなったように思える。不気味さに裏打ちされた誇り高さのようなものは消え失せ、ただただ三つの首を持った犬に成り果ててしまった。老犬と呼んでも差し支えない草臥れ具合であったが、一年も経たずに十年も経ったような顔つきをしているのは腑に落ちない。皮膚病の方もかなり進行しているようで、流石に形容ははばかるが、惨状、目をそむけしむるものがあつた。おりからの炎熱とともに、ただならぬ悪臭を放つ。動物病院へ連れて行くにも、こんな特異な犬を診てくれるところはそうないだろうし、噂になるのでやめてください、殺してください、と家内は冷酷に言う。こんな時になってくると、かえって女の方が度胸が良い。家内の刺々しい言葉を理解しているのか知らないが、ポチも自身のみすぼらしさを隠すように大小屋に籠りきりになった。時折森に入って狩っていた小動物も次第に小さくなり、今では鼠の死骸が数匹転がっているばかりである。あんまり見るに堪えないものだからと知り合いに便宜を図ってもらい皮膚病の薬をポチに飲ませるが状態は依然よくならない。

それでも、毎夕ポチは散歩紐を啜えて私のところへやってくる。弱ったポチに向かって野良たちは奮って煽りたて、吠えた。ポチはそっぽを向いて虚勢を張るが、野良は吠えるのをやめない。幸い、ポチにけちよんけちよんにされた苦々しい思い出があるからなのか襲い掛かってくる犬はいなかったが、歩みを進めることに罵声を浴びせられる様はまるで罪人を連れて歩いているかのようなだった。私は俯きがちに歩き如何ともしがたい気持ちに駆られる。

その犬には見覚えがあつた。私の前に立ちほだかつたのは、以前ポチに黜られた赤毛のムク犬。当時よりも一回りも二回りも大きくなった赤毛は、ポチを一瞥し、あろうことか私のもとへ駆けよってきた。まったく私が想像しうる嫌な予感というのは大抵が見事に的中するものだと辟易しながら、私は一目散に走りだす。二十メートルほど走って息が切れ、犬口風情に弄ばれてやがる、といつ追いついてもおかしくないムク犬を視界に入れようと振り返ると、彼奴はポチと格闘しているのだった。杞憂だと息をつく。ポチは勝てるだろうか、とその喧嘩を眺めていると、ポチは自身が負けることを勘定に入れているのか、私の言い分を気にしているのか、一向に反撃する気配を見せない。ただ赤毛の攻撃を躲そうとしているだけで、へこへことした態度で跳び回っている。辺りを囲った野良たちはそんなポチを嗤った。私は憤怒した。「赤毛は卑怯だ、やれー」。そうすると、ポチは揺ら揺らと身体をしなら

せて強烈な殴打を赤毛に見舞い、赤毛もすぐさまポチの首根っこに咬みつき反撃、そしてそのまま思索入り乱れる中揉みくちやの状態となり砂埃が舞う。まったく、ケルベロスという生物はやはり獰猛かつ怖ろしい攻撃本能を備えているものだ。結局戦い始めてしまえば血湧き肉躍るといのが捕食生物の性なのだろう。あれだけ闘り合ったら、ポチの皮膚病も移る。馬鹿な赤毛だ。

赤毛に辛勝したポチは身体こそポロポロだったものの、目には以前のような覇気があり、身体から立ち上る湯気は生気に溢れ、いち早い回復の気配を予感させた。闘争こそケルベロスの生きる道で、それ以外は死なのだと思った。私はまたケルベロスに震え慄く日々がいつそう恐怖せしめるものになるだろうと腹を括り、憂鬱な気分になった。

しかし、一夜明けるとポチはいなくなっている。森へ狩に出かけたのだろうかと思ったが、夕方になってもポチは帰ってこない。

そして数日が経過した。原稿が全くといいほど進まずに筆を回していた私は頭のリフレッシュを計るために散歩へ出かけることにした。「またですか」と家内は私の難航ぶりにほとんど呆れている。まったく執筆再開の機会がどこでスパークするか分からんものだ、と私は川のせせらぎを眺めていると、橋の下の鬱蒼としたところで千切れたような動物の死骸に蠅がたかっていることを確認する。この辺りでは大して珍しいことではないが嫌なもんを見たなあ、と素通りしようとする、その死骸の周辺に頭部らしき丸い物体が三つ転がっていることに気がつく。そしてそこへ繋がっている大きなしめ縄には見覚えがあった。

私は帰宅し、犬小屋や餌等をあらかじめ片付けて捨ててしまおう。随分とすっきりしたようだった。ようやく、私はケルベロスの齋す一時の油断もならない日常から解放されたのだと思つて、足を振って、酒を煽って、踊った。もともと殺そうにも死ぬあてのないような駄犬が、私のあずかり知らぬところで黙然と死んでいたのだ。これ以上の僥倖はない。せいせいたくraisenからだ。私は家内を呼び勝利の祝杯を挙げて泥のようになるまで酩酊する。まったく霞が晴れたような夜だった。

そして、私は夢を見る。泥酔すると必ずと言っていいほど見る夢だ。橋の下に蹲るのを放置したまま、葬儀をしなかった祟りのつもりか何なのか知らないが、ポチは枕元に化けて出る。背後には冥府の門があり、彼奴はその前で何も言わず私を待っているのだ。夢ならば痛覚はないことに勢いをつけて、私はポチの頭に触れる。ポチ、ポチ。僕はお前が嫌いだっただ、ポチ、吊いなんてしてやるもんか、ポチ。

ポチはやはり「ビヤウ」と不吉めいた声で鳴いた。(了)